

2008 年度学会賞受賞者のことば

平田賞を受賞して

森林総合研究所十日町試験地 竹内 由香里

2008 年度日本雪氷学会平田賞をいただき、大変ありがたく光栄に思います。受賞の件名は「積雪の物理量測定手法の改良と斜面積雪安定度の研究」です。対象になった観測研究は、これまでに所属した研究機関で、多くの方にご指導、ご支援をいただいてやってこられたことを思い起こし、改めて感謝しています。また、推薦して下さった方々に厚くお礼申し上げます。

私は北海道大学を出てからこれまでに 4 つの研究機関でお世話になりました。森林総合研究所に採用されるまでは、ほぼ 2 年ごとに転々と所属は変わりましたが、幸いなことに貫して、積雪や融雪、雪崩の研究を野外での観測中心に続けることができました。様々な所でいろいろな人と一緒に観測をする機会に恵まれたことは、測定上のちょっとした、それでいて非常に有効なコツや工夫を知るチャンスになりました。今まで知らなかった新たな観測機器と出会うチャンスにもなりました。中でもプッシュゲージ（市販のデジタル式荷重測定器）を初めて手にしたときは、携行しやすく、短時間に、細かい間隔で、簡単に抵抗力を測れることが大変魅力的で、積雪観測用の‘硬度計’として普及すればよいと思いました。その後、硬度から密度や剪断強度へと応用できることがわかり、特に薄くて弱い積雪層の安定度（剪断強度と剪断応力の比）を知りたい雪崩調査において欠かせないものとなりました。森林総研十日町試験地では、冬期 10 日毎の積雪断面観測を 1939 年から継続して行なっています。測定項目は時代とともに少しずつ変化（増加）し、1999 年からは 0°C の各層で含水率も測定するようになりました。1~2 月の真冬でも、積雪深が 2 m 以上あっても‘全層 0°C’が珍しくない十日町では、それだけ含水率を測定する回数が多いこととなります。そ

れでも各層の含水率測定が可能になったのは、誘電方式の含水率計を使用し、短時間に手軽に測定できるようになったからといえるでしょう。そんな誘電式含水率計について、従来の熱量方式とは測定原理が大きく異なるけれども同等の結果が得られるという証がほしくなりました。そのような考えから、硬度や含水率の新たな測定手法を紹介し、従来と同等の結果が得られることや測定上の特長をまとめました。論文にまとめたデータは、これまでに行なった数々の積雪断面観測によるもので、多くの方と共に得たものです。楽しかった、そして諸先輩から色々なことを教わった観測がよい思い出だけに終わらずに、平田賞をいただける成果にできたことを嬉しく思います。

ところで、平田賞の平田徳太郎氏は、本学会の前身である日本雪氷協会の初代会長であると同時に、私が勤務する十日町試験地が 90 余年前に森林測候所のひとつとして創設された頃、全国の森林測候所を総括する責任者になられた方でもあります。まさに、十日町試験地の今につながる積雪観測の基礎を築いて下さった方です¹⁾⁻³⁾。積雪や雪崩の観測研究でいただいた平田賞を平田先生が喜んで下さればよいと、突然、平田先生とご縁を想ってみたりしましたが、雪の観測環境に恵まれた十日町試験地で雪氷学の研究ができる今の日々を大切にしたいと改めて思います。

文 献

- 1) 遠藤八十一ら, 1988:「雪氷協会いまはむかし」平田徳太郎氏と林試・十日町試験地. 雪氷, **50**, 117-119.
- 2) 四手井綱英ら, 1960: 平田先生を偲んで. 雪氷, **22**, 157-164.
- 3) 武田繁後, 1960: 平田徳太郎先生のあしあと一年譜のかわりに一. 雪氷, **22**, 164-166.